

## エピソード1：ミドシン、ピポ語で詩に挑戦

夜のピポドーム。

ミドシンはデスクの上にピポ語のノートを広げていた。

「……ピポ語って美しい。ちゃんと作品にしたら、きっと感動を生む言語になる」

そう思ったミドシンは、ピポ語で詩を書こうと決意した。

まずは構成を考える。

起承転結、それに合わせたピポ語の感情表現。

「💭📝✍️」（訳：「まずは構成だ。感情の流れを意識しよう」）

彼は紙に4つのブロックを描き、「出会い」「風」「光」「希望」というテーマを置いた。

そこにシンプルなピポ語を当てはめていく。

リビングからピポミが顔を出す。

「まだ起きてるの？」

「📝✨💡」（訳：「詩を書いてるんだ。思いついたんだ」）

ピポミがふっと微笑んで言った。

「へえ、ステキね。詩人さん」

その言葉がミドシンのやる気に火をつけた。

「🔥💪」（訳：「やるぞ、絶対完成させる！」）

---

## エピソード2：ピポ語辞典とにらめっこ

次の日、ミドシンは図書室の一角にいた。

「ピポ語辞典・完全版 第14刷」をテーブルに広げる。

ミドピポが近づいて来て言った。

「📖👀？」（訳：「なにしてんの？」）

「📖🔍✍️🎵」（訳：「詩を書くために単語を探してるんだ」）

ミドピポは笑いながら言った。

「🧠📖💤」（訳：「すげえけど…難しそうで寝そうやん」）

辞典には感情や自然を表す絵文字がずらり。

ミドシンは「風=🌬️」「光=☀️」「時間=⌚」などをメモ帳に書き写していく。

語彙を選ぶとき、彼は悩んだ。

「“希望”をピポ語でどう書く…？」

「💭🌱❓」（訳：「希望って、どの絵文字が一番近いだろう？」）

何度もページをめくった末、彼は「🌱」と「🌅」の組み合わせを選んだ。

「平和」と「新しい朝」を表現するコンビネーション。

「📝💡」（訳：「これだ！これが“希望”の形！」）

---

## エピソード3：完成！ピポ語の詩

そしてついに、詩の原稿が完成した。

ミドシンは静かに読み上げる。

詩のタイトルは「🌬️☀️🌱（かぜとひかりときぼう）」



🌬️👣（風が僕を連れていく）  
🌲🎵（森の声を聞きながら）  
⌚📖（過ぎゆく時間のページを）  
💭🖋️（夢で塗りつぶしていく）

☀️🌈（光が雲を切り裂く）  
🌅🌱（朝が新しい希望を連れてくる）  
💚👁️（僕はその光を見つめ）  
😊☀️（心で受け止める）

---

ピポリンが後ろで拍手した。

「これは…すばらしい。まさにピポ語の新しい表現だよ！」

悠ピポもうなずいた。

「ミドシン、お前やっぱすごいな」

ピポポは感動して目をうるませた。

「😭👏」（訳：「とっても素敵だったよ…！」）





ピポミは、ゆっくりとミドシンの頭をなでた。

「すばらしい詩だったわ。あなたの言葉、ちゃんと届いたよ」

---

その夜、ミドシンはノートにこう記した。

「ピポ語は、感情そのものだ。  
だから、誰にでも伝わる言葉になる」

ページの下にはサインと、詩のシンボル「   」。  
ミドシンの新たな物語は、ここから始まる。